

研究資料 黒田清輝宛外国人留学生書簡 影印・翻刻・解題

著者	吉田 千鶴子
雑誌名	美術研究
号	414
ページ	58-73
発行年	2015-02-20
URL	http://id.nii.ac.jp/1440/00006052/



研究資料

黒田清輝宛外国人留学生書簡 影印・翻刻・解題

吉田 千鶴子

はじめに

東京文化財研究所蔵黒田清輝関係資料中には六通の東京美術学校（美校）西洋画科留学生の書簡がある。中国人として最初に留学した黄輔周、二番目の李岸（叔同）、および、その後に留学した汪済川（洋洋）、嚴智開、朝鮮人として二番目に留学した高義東の書簡である。美校留学生については美校の記録文書や東京芸術大学大学美術館に収蔵されている卒業制作自画像、同大学附属図書館に収蔵されている卒業制作写真アルバムその他によって概要を把握できるが、個々の留学生に関しては資料が非常に少なく、たまたま本人が書き残したものを除いては留学の動機や留学中の生活を知る手掛かりは皆無に近い。そのため、この六通の書簡は、初めて本人の生の声を聞くような思いを抱かせる得難い資料であり、文面から新たな情報も得られるので、きわめて貴重である。とりわけ、中国と韓国でそれぞれ近代洋画の草分けと称される李叔同、高義東といった重要人物の、恩師に宛てた書簡は、研究者たちの強い関心を引くだろう。なお、これらの他に黒田清輝関係資料中には重野紹一郎の潘子傑（寿恒か）推薦状がある。これも留学生に関係があるので、併せて紹介する。

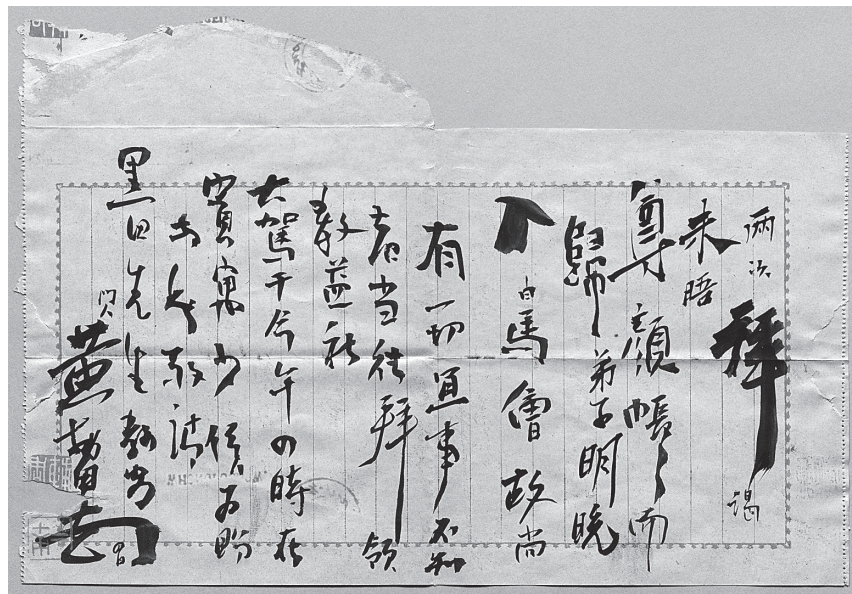
（凡例）

東京文化財研究所が所蔵する黒田清輝宛東京美術学校外国人留学生書簡を影印を付して、翻刻する。翻刻にあたっては以下の点を配慮した。

- 一、本文の行取りは原文通りとし、影印版と照合できるように配慮した。
- 二、漢字は原則として常用漢字に統一した。
- 三、原文の句読点が必要な箇所は一時空きとした。
- 四、原文の誤字および文法の誤りは原文のままとし、必要のある場合のみ〔 〕として傍注を付した。
- 五、漢文の書簡については「大意」に書簡本文の和訳大意を記した。
- 六、解題には各人の留学事情や書簡の背景等について記し、特に現今の研究状況からみて重要度の高い高義東書簡についてはやや詳細に記した。

明治三十七年十二月三日付 封書

(縦一六・六cm、横三〇・六cm)



兩次拝謁

未晤

尊顏帳々而

歸弟子明晩

入白馬会 故尚

有一切宜事不知

者当往拝領

教益所

大駕于今午四時 在

賓寓少候 為盼

專此 敬請

黒田先生 教写

門人黄輔周頓首 (四) 日

1. 黄輔周書簡

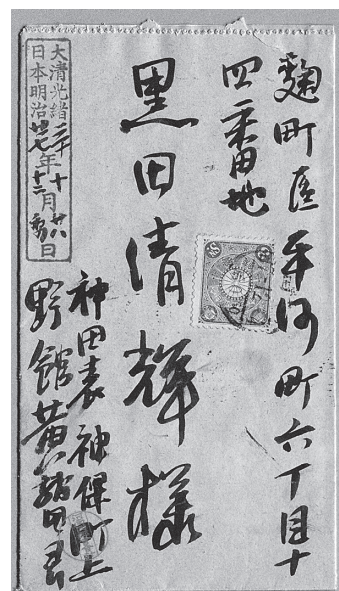
大意

「二度拝謁（しようとしたが）、貴方様には未だに対面できず、残念の思いで帰りました。弟子（の私）は明晩白馬会に入ります。故にまだ何もわかつておらず、伺って貴方様に教益を拝領したく存じます。今日午後四時に、貴寓居で少々時間をいただければ幸いです。」

解題

黄輔周（一八八三〜）は美校に留学した最初の中国人で、直隸省出身。溜池の白馬会研究所で修行した後、明治三十八年十月、二十二歳の時西洋画科撰科に入学し、同四十年に中途退学した。当時の美校の規定では外国人留学生は撰科生として受け入れ、本科生と同じ教室で同じ実習教程を修めさせることになっていた。西洋画科が教室制を実施する（大正七年）前だったから、特に誰かに師事したということはない。

黄甫周は謎の画家である。中途退学のため、卒業制作自画像も残されていない。故鶴田武良氏の調査によれば、二難、二南と号し、河北の人（美校への届け出と異なる）。山東省の高等学堂を卒業後日本に留学。美校在学中は同窓生李叔同や曾延年らの新劇団体「春柳社」に参加し、帰国後も新劇活動を続け、また、軍隊生活を送るなどした。一九二八年から舌画を学び、天津美術館や上海震旦大学その他で舌画の展覧会やパフォーマンスを行なって注目された。一九八五年七十五歳まで生存が確認されているという（「黄輔周の舌画——民国期絵画資料——」本誌第三九〇号、平成十八年十二月）。



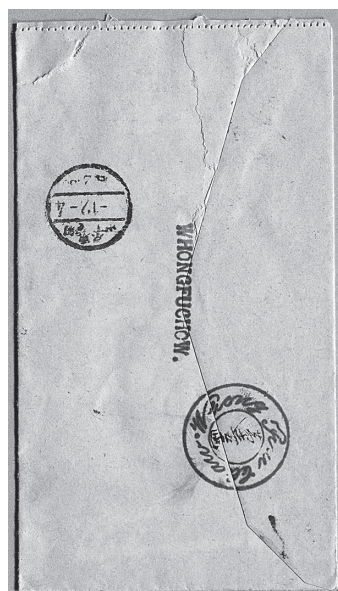
麴町区平河町六丁目十
四番地

黒田清輝様

大正光緒三十一年十月廿八日
日本明治廿七年十二月初四日

神田表神保町上
野館黄輔周ヨリ

この書簡は白馬会研究所で修業を始める直前のもの。来日早々の黄輔周が熱心に黒田清輝に接触しようとしていた様子が窺われる。冒頭に挨拶の言葉もなく、唐突に要件を述べているので、前の便箋の欠損を疑ったが、原本を見ると、この書簡は封筒の内側に文を書くかたちのもので、欠損ではないことがわかる。



封 WHONGFUCHOW.〔スタンプ〕

〔明治四十二年〕九月六日付 封書

（縦二一・五cm、横二七・五cm）

拝啓 陳れば私は前週の前々東京へ帰りまし
た直様亀山克己様の御宅へ参りました亀山
様の話に聞きまして先生が私の事に就いていろ／＼
な御世話を下されまして、誠に有難御座いま
す又亀山様が「汝が公使館の紹介書を貰
ひましてから直ぐ黒田先生の御宅へ伺ひなさい」
と私に言附けました其れ故に早速公使館
へ紹介書をもらひまして今朝九時頃に御
宅へ参りましたが先生が御不在に成り
ましただからして今晚又紹介書を持つ
て参りましたので御座います何
卒御紹介して願ひ度いです
黒田先生様 汪済川
九月六日

黒田清輝先生様
御親展

本郷台町三十七番 朝日館
より

黒田清輝宛外国人留学生書簡 影印・翻刻・解題

2. 汪済川（洋洋）書簡 解題

汪済川（大正五年六月十七日美校へ汪洋洋と改名届提出）
は山東省出身。官費留学生。明治四十二年九月に美校西
洋画科撰科に入学。翌四十三年春の白馬会第十三回展に
油絵を出品。大正四年に美校同窓生嚴智開、江新らと中
華美術協会を創設。同六年三月卒業。卒業制作自画像が
東京芸術大学大学美術館に収蔵されている。帰国後、一
九三〇年に嚴智開の天津市立美術館の秘書長となった。

書簡に登場する亀山克己は明治三十八年美校西洋画科
撰科を卒業。美校の記録文書によれば、明治十三年生ま
れ、本籍は東京市牛込区北町十七番地、士族。職業は自
営。白馬会に四回出品している。黒田清輝との関係につ
いては未詳。

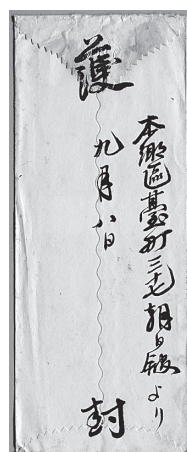
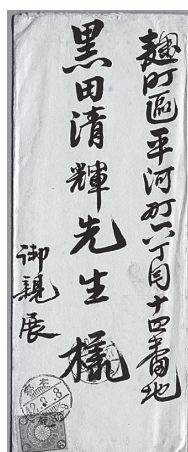
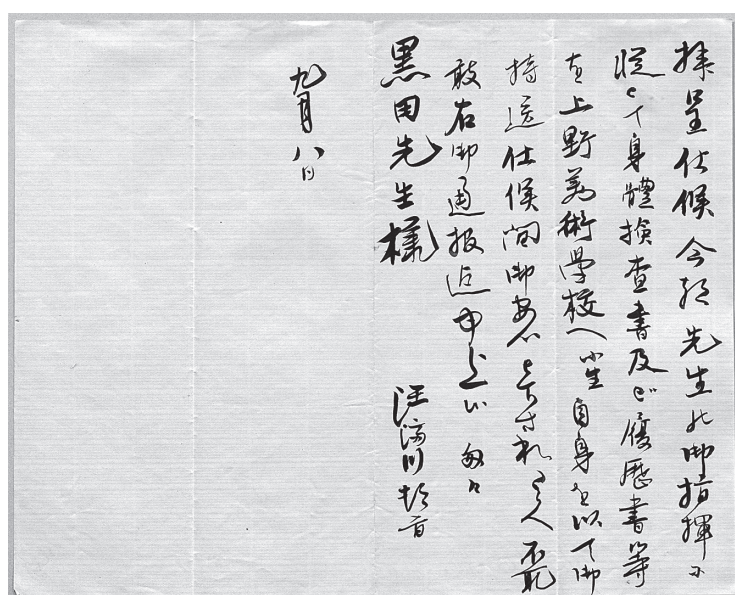
この書簡には年記がない。次の書簡3（明治四十二年）
と同様に美校入学手続きに関する要件が記されているの
で、同時期の執筆とも考えられるが、文面によれば、汪
は亀山克己に教えられて初めて公使館の紹介書が必要な
ことを知ったほど手続きに無知であつたらしく、やや奇
異な感がある。そこで、汪から紹介書を受け取った黒田
は慎重を期して一年間白馬会研究所あたりで修業させて
みてから可否を決めることにしたのではないかという推
測をたてて四十一年執筆とした。

なお、公使館の紹介書というのは当時の官立学校留学
生に適用された「文部省直轄学校外国人特別入学規定」
の第一条にある「外務省、在外公使館又ハ本邦所在ノ外
国公館ノ紹介」にあたる。

黒田清輝先生様
御親展
本郷台町三十七番 朝日館
より

明治四十二年九月八日付 封書

(縦二〇・六cm、横二五・五cm)



拝呈仕候今朝先生の御指揮に
従ひて身体検査書及び履歴書等
を上野美術学校へ（先生自身を以て御
持送仕候間御安心被下されたく不取
敢右御通報迄申上候 勿々

黒田先生様

汪済川頓首

九月八日

拝呈仕候今朝先生の御指揮に
従ひて身体検査書及び履歴書等

を上野美術学校へ（先生自身を以て御
持送仕候間御安心被下されたく不取
敢右御通報迄申上候 勿々

持送仕候間御安心被下されたく不取
敢右御通報迄申上候 勿々

黒田先生様

汪済川頓首

九月八日

麹町区平河町六丁目十四番地

黒田清輝先生様

御親展

本郷区台町三十七 朝日館より

護

九月八日

封

3、汪済川（洋洋）書簡

解題

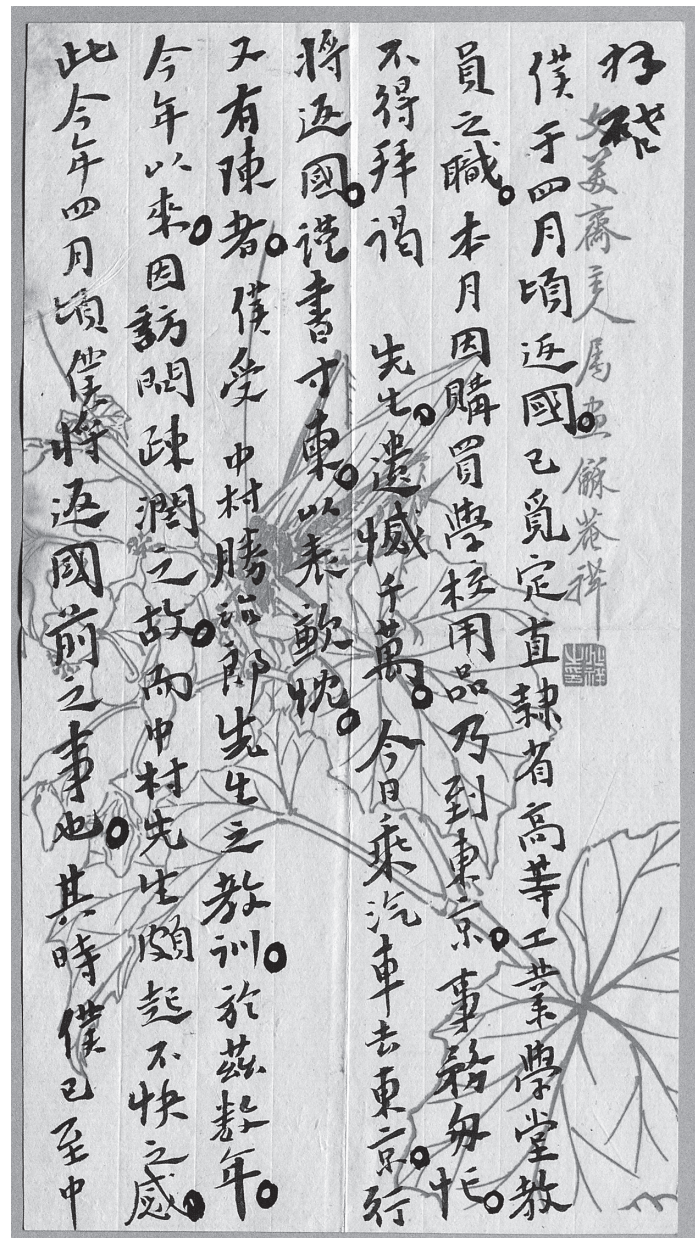
黒田の指示により入学手続きに必要な身体検査書と履歴書等を美校に提出したという報告である。手続きを完了し、汪は九月二十三日に入学を許可された。

付記すれば、汪は入学から大正六年の卒業までに足掛け八年も費やしている。それは、美校の記録文書に明治四十四年十一月十五日より四十五年七月十日まで事故により休学許可、大正元年十月二十三日授業料滞納除名、同二年九月八日再入学と記されていることからわかるとおり、休学・帰国していた時期があったためである。休学理由は「事故」とされたが、実際は辛亥革命・中華民国成立による故国の社会的大変動によるものだったろう。

美校在学中にこの大変動に遭遇したのは、汪をはじめ白常齡、陳之馴、潘寿恒、方明遠、雷毓湘らで、雷毓湘は大正二年五月に「私儀今般国事の都合により猝かに軍人志望の余儀なきに至り」云々と理由を明記して一旦退学している。安閑と勉学を続けたい状況だったのである。しかし、退学・休学した者は復校し、いずれも卒業を果たしたのであった。

明治四十四年六月十五日付 封書 箋紙二枚

(各縦二三・一cm、横一二・五cm)



拝啓

僕于四月頃返国。已覓定直隸省高等工業学堂教員之職。本月因購買学校用品乃到東京。事務多忙。不得拝謁 先生。遺憾千万。今日乗汽車去東京。行将返国。謹書寸柬。以表嘆忱。

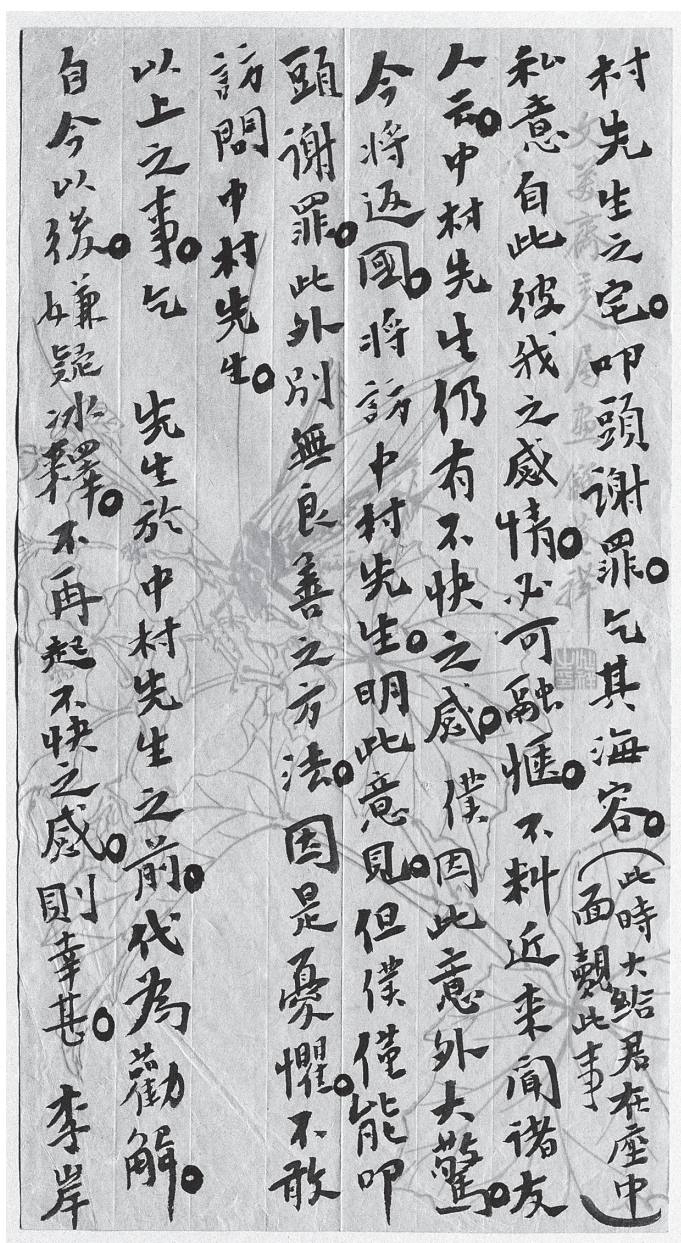
又有陳者。僕受中村勝治郎先生教訓。於茲数年。今年以来。因訪問疎遠之故。而中村先生頗起不快之感。此今年四月頃僕将返国前之事也。其時僕已至中

4. 李岸（叔同）書簡
大意

「拝啓 私は四月頃帰国しました。すでに直隸省高等工業学堂教員の職が確定しています。本月、学校用品購入のために東京に来ました。事務多忙のため先生に拝謁できず、遺憾千万です。今日、汽車に乗って東京を去り、帰国しますので、謹んで寸書をしたため、嘆忱の意を表します。

お話ししておくべきは、私は中村勝治郎先生の教訓を受けることここ数年。今年になつてから訪問が疎遠になつたため、中村先生は非常に不快の感を起こされました。これは今年四月頃、帰国を前にしてのことですが、私は中村先生宅を訪問して謝罪し、ご海容を乞いました（このとき大給君が座中において、このことを見ていました）。私はこれによつてきつと彼私の感情が融けるにちがいないと思ひました。ところが最近諸友の言うのを聞けば、中村先生に不快の感ありとのこと。私はこの意外のことに大変驚きました。今まさに帰国の時となつて、中村先生を訪問して意見を明らかにし、謝罪もする以外に良善の法はないのでしょうか、憂懼のため敢えて訪問はいたしません。

以上のことは先生が中村先生の前で私に代わつてとりなしてください。そして、今後嫌疑が氷解して再び不快の感を起こされないようになれば幸甚です。」



解題

李岸（叔同。一八八〇—一九四二）は中国近代洋画のみならず近代音楽・演劇の父とも称される。出家して弘一と改名。修行を積んで高德の僧と崇められるに至り、その書も高い評価を得ている。中国各地の記念館その他で業績の顕彰・検討がなされつつある偉人である。

彼は明治三十九年九月に美校西洋画科撰科に私費留学し、同四十四年三月に卒業。卒業制作自画像が東京芸術大学大学美術館に収蔵されている。日本留学の経緯や美校在校中および帰国後の活動の概要等は拙著『近代東アジア美術留学生の研究——東京美術学校留学生史料——』（二〇〇九年、ゆまに書房）を参照されたい。

この書簡は卒業して帰国し、再び来日した李叔同が、赴任先の直隸高等工業学堂での授業のために、学校用品を購入して帰国する慌ただしさのなかで書いたものだが、日本を去るにあたって、中村勝治郎との感情の行き違いが解消できないことが心残りで、その仲裁を黒田に頼んでいる。このことは李が黒田と親しい間柄だったことを物語るとともに、黒田と中村の特別親密な関係も念頭に置いていたことを示している。黒田は京都で中村と知り合い、美校に呼んで西洋画科教場助手、次いで助教授に就任させた（拙著「黒田清輝の偉名にかくれた、もう一人の画家 中村勝治郎」一〇五「絵」二一七—二二一、一九八二年三月—七月、日動出版）。中村は公私にわたって黒田を補佐する役回りを務め、生徒たちの世話や科内の雑務を担当した。この書簡で李叔同は特に中村の教訓を数年間受けたと述べているが、留学生の世話なども中村の役目だったのだろう。その近しい関係の中村の忌諱に

村先生之宅。叩頭謝罪。乞其海容。（此時大給君在座中面觀此事）

私意自此彼我之感情。必可融愜。不料近來聞諸友

人云。中村先生仍有不快之感。僕因此意外大驚。

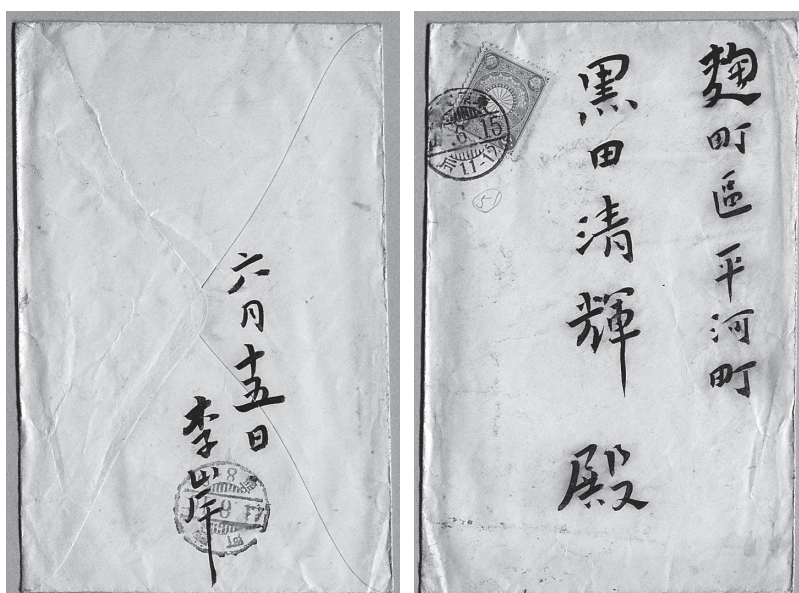
今將返國。將訪中村先生。明此意見。但僕僅能叩

頭謝罪。此外別無良善之方法。因是憂懼。不敢

訪問中村先生。

以上之事。乞 先生於中村先生之前。代為勸解。

自今以後。嫌疑冰釋。不再起不快之感。則幸甚。李岸



麹町区平河町

黒田清輝 殿

六月十五日

李岸

触れたまま帰国するのが李叔同は残念でたまらず、黒田に仲裁を頼んでいるのだが、そこにほのぼのとした師弟間の情のようなものが感じ取れるのが印象的だ。中村は非常に気難しい人物だったといわれるが、李叔同に対する怒りの原因は何だったのだろうか。いずれにせよ、黒田のとりなしによってか、李叔同の懸念はその後解消したようだ。なぜなら、李叔同は、大正四年には自分たち篆刻クラブ作成の『楽石集』『楽石社友小伝』計十八冊を母校に贈り、また、同七年には母校校友会に対し、出家して法名演音、号弘一と改めたので、今後の通信は杭州第一師範学校内李増栄氣付にしてくれと通知したりしているからである。文中、「大給」とあるのは明治三十九年西洋画科撰科卒業生で黒田や中村と近い関係にあった大給近清のことと思われる。彼は子爵大給恒の息子で黒田清輝の妹純の夫であった。

大正七年三月二十日付 封書

(縦二四・二cm、横一二・二cm)

黒田先生賜鑒敬啟者久疏問候至以為罪數年在江戸留學以來諸蒙

指教感謝無已此次改赴美國留學定於四月十三日由上海出帆十五日當能再過東京時日太少恐不能登門告辭乞諒之將來候毆戰停止後再圖赴佛也離別後仍盼常賜

教言為禱此問

土平 福

門生

嚴智開

七年三月二十日

「黒田」先生、賜鑒敬啟者久疏問候、至以為罪、數年在江戸留學以來諸蒙

指教感謝無已、此次改赴美國留學、定於四月十三日、由上海出帆十五日、當能再過東京、時日太少、恐不能登門告辭 乞諒之 將來候毆戰停止後再圖赴佛也 離別後仍盼常賜

教言為禱此問

幸 福

「 七年三月二十日

門生 嚴智開 拜」

5. 嚴智開書簡

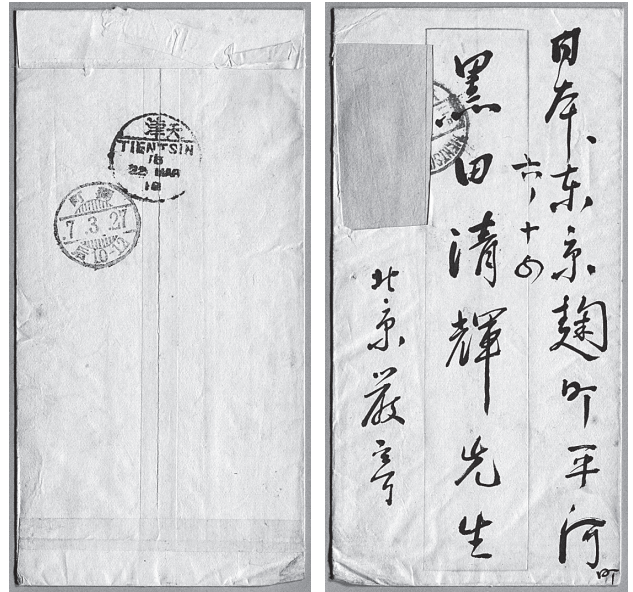
大意

「黒田先生 久しくご無沙汰いたしましたすみません。数年東京に留學し、それ以来皆様のお教えに対する感謝は已むことがありません。このたびあらためてアメリカへ留學することになり、四月十三日出発と定め、十五、六日上海出帆、再び東京を通過しますが、時日が大変少ないため、お訪ねしてご挨拶できないことをお許しく下さい。将来欧州戦争の停止を候った後、再びフランス行きを計画しています。離別後、常にお教えを賜ったことをしきりに顧み、幸福をお祈りします。」

解題

嚴智開（一八九三—一九四二）は大正元年から同六年まで美校西洋画科撰科に在學した。東京芸術大学美術館に卒業制作自画像が収蔵されている。略歴については『近代東アジア美術留學生の研究』（前出）で紹介したが、昨年、孫列・江紫媛著「嚴智開、劉子久与民国時期的第一座公立美術館——天津市立美術館史料の整理与研究」（『J1 & 2015 項目 第一階段国際學術論証会研討文集』天津大学王学仲芸術研究所）においてその足跡と業績の意義が詳しく紹介された。

嚴智開は著名な教育家で南開大学創設者の一人である嚴修の第五子として天津に生まれた。兄の嚴智怡は高等工業学校に留學し、天津博物館を創設して館長となった。一九〇三年に嚴修が自宅に蒙養園（幼稚園）を開設して日本から大野伶子を教員に迎えると、嚴智開は大野に親炙し、その結果芸術的関心も育まれた。天津第一中学校



日本東京麹町平河町

六ノ十四

黒田清輝先生

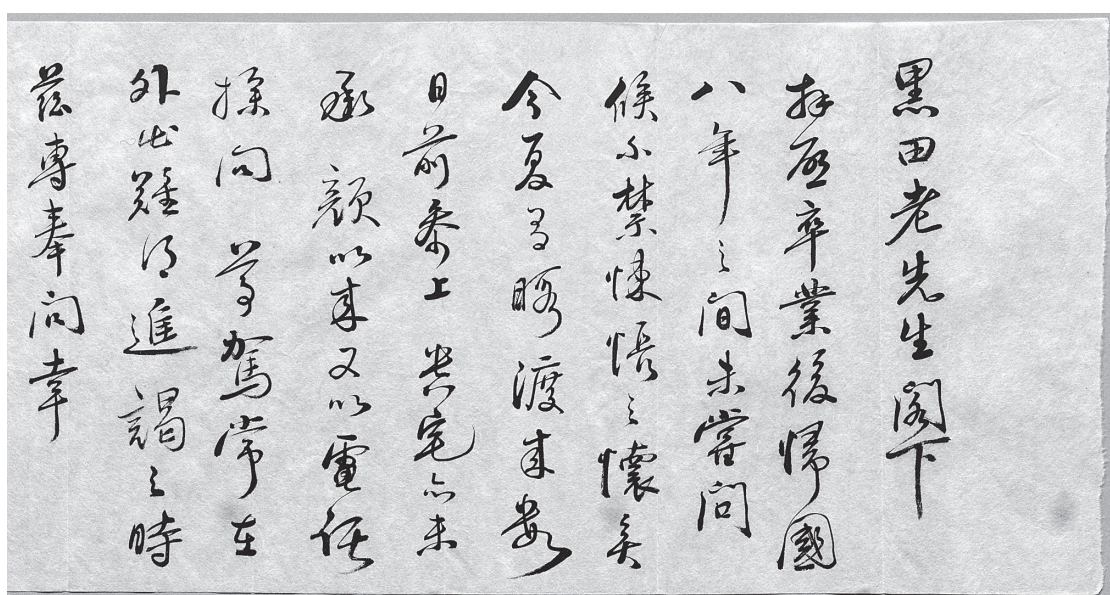
北京 嚴寄

卒業後来日して美校に留学。さらに研究生となったが、退学して渡米。まずコロンビア大学に在学し、次いでパリ美術学校で学んで一九二八年中国に帰国。すぐさま天津市立美術館建設計画に着手し、市から日本の現代美術館制度調査に一ヶ月間派遣された。それに関する記事が正木直彦の『十三松堂日記』（一九六五、六六年、中央公論美術出版）にある。一九三〇年十月、中国最初の公立美術館としてこの美術館が開館し、嚴智開が館長に就任した。その後、三四年から三七年まで国立北平芸術专科学校長も務め、東京美術学校を模範とする教育組織を定めたことで知られる。

黒田清輝宛書簡は大意を抱いてまさに欧米へ出発しようというときに、日本の恩師や知人に出した挨拶状で、謄写版印刷の本文に冒頭の「黒田」と「七年三月二十日 門生嚴智開」の文字が墨で書き込まれている。封表には「北京 嚴寄」とあるが、封裏の消印には投函地は天津とある。

大正十一年八月十六日付 封書

(縦一七・七cm、横五六・六cm)



黒田老先生閣下

拝啓 卒業後帰国

八年之間、未嘗問

候、不禁懐悵之懷候

今夏有暇渡来、数

日前参上貴宅所、未

承顔、以来又以電話

探問、尊駕常在

外出、難得進謁之時

茲專奉問幸

6. 高義東書簡

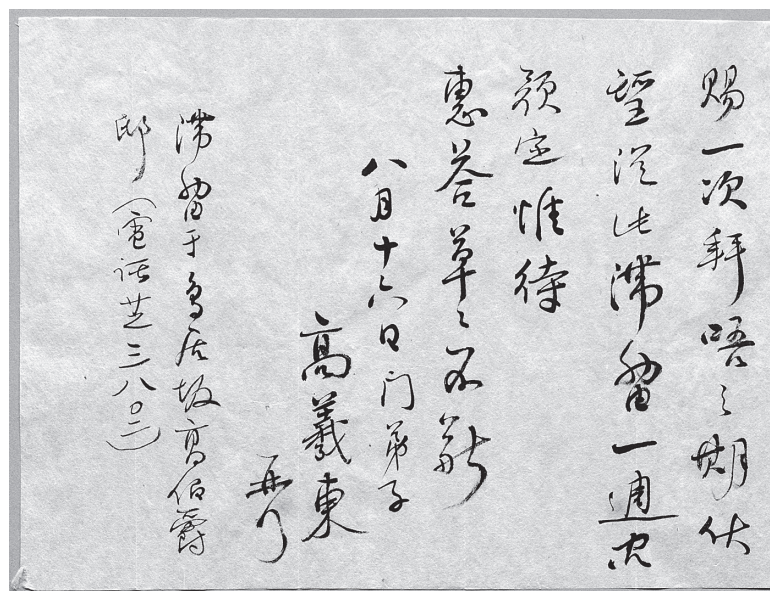
大意

「拝啓 卒業後八年の間、一度もお便りせず、懐悵の
 思いを禁じえません。この夏に暇がとれたので渡来し、
 数日前に貴宅に参上しましたが、お目にかかれませんでした。
 それ以来また電話で問い合わせましたが、貴方様
 は常に外出中で、伺って拝謁する時を得ませんでした。
 ここにひとえに、幸いにも一度お目にかかる時を賜れな
 いかお尋ね申し上げます。伏し望みます。これより滞留
 は一週間の予定ですので、ご恵答をお待ちします。」

解題

高義東(号春谷。一八六八―一九六五)は朴鎮栄に次ぐ
 二番目の朝鮮人留学生として明治四十二年九月に美校西
 洋画科撰科に入学し、大正四年三月に同科を卒業した。
 韓国最初の洋画家・美術振興の指導者と目され、業績の
 検討・顕彰がなされてきた。近年では二〇〇五年にソウ
 ル大学美術館で「春谷 高義東 四〇周年特別展」が開
 催されている。一九二〇年代半ば以降は東洋画に転じ、
 解放後も美術界において重きをなし、民主党参議院議員
 も務めた。

美校留学に関する資料としては卒業制作自画像(挿図
 1)および卒業記念集合写真(東京芸術大学大学美術館所
 蔵、挿図2)、卒業制作「姉妹」の写真(同大学附属図書
 館所蔵卒業制作写真アルバム)と美校出版物上の僅かな記
 事が現存しており、留学事情を把握するために必要な記
 録文書類は明治四十四年二月の美校火災で失われたらし
 い。したがって、この黒田宛書簡は稀有な資料であり、



賜一次拜晤^(通)之期、伏

望從此滞留一週間

預定、惟待

惠答草々不敬

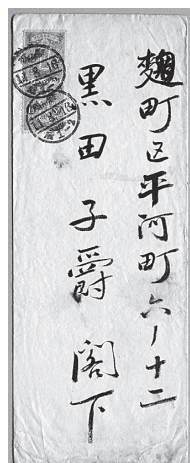
八月十六日 門弟子

高義東

再行

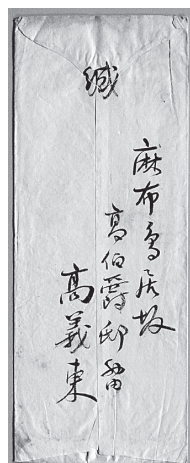
滞留于鳥居坂高伯爵

邸(電話 芝三八〇二)



麹町区平河町六ノ十二

黒田子爵閣下



麻布鳥居坂

高伯爵邸留

高義東

その人物像を推察する手掛かりとなるとともに、これまでに知られていなかった情報も含まれているので、資料的価値がきわめて高い。

この書簡の第一に注目すべき点は、用箋こそ質素だが墨筆の書体の謹厳さと文章の丁寧さが際だっていることである。馴れ馴れしさは微塵もない。敢えて宛名を「黒田子爵閣下」とし、本文冒頭にも「黒田老先生閣下」と、高位高官に対する敬称を付している。それは黒田が東京美術学校教授、帝室技芸員、子爵(大正六年襲爵)、帝国美術院会員・院長(大正十一年七月就任)、貴族院議員等の公職に就いていたことへの敬意の表明であるとともに、後に述べるように、高義東自身、韓国(大韓帝国)宮内部掌札院礼式官として官費留学した上流階級の身分であったので、その立場の表明でもあったろう。

丁寧な漢文で書いていることも注目に値する。彼は美校留学前に漢城法語学校で四年間フランス語を学び、のち五年間宮内府の主事としてフランス語の通訳・翻訳に従事したというから、フランス語は得意であり、黒田はもちろんフランス語に堪能だった。したがって、日本語に自信がなければフランス語で書いてもよかつた筈だが、そうはせず、敢えて漢文にしているのである。それは、漢文が韓国政府と上流階級の公用語だったため、仕来りに倣ったとも言えるが、それだけでなく、上流知識階級の矜持から出た行為でもあったように受け取れる。この、上流階級意識ないし矜持の表明ということは、卒業制作自画像(前出)についても言えるのではないだろうか。彼は自画像に留学前の平常の姿(官服ではない)だったところの程子冠を被り、トゥルマギ(周衣)を着

挿図1 東義東「程子冠をかぶる自画像」1915年 東京藝術大学

て威儀を正した姿を描いている。留学中は制服（詰襟の学生服。卒業記念写真、前掲挿図2参照）で通学していたようだが、それは色といい形といい面白味がなく、日本人生徒も多くが和服や洋風平服姿の自画像を描いている。そこで、彼は母校に残す自画像であるからには美的でしかも韓国の上流階級を象徴する衣冠姿を選んだものと思われる。謹厳で誇り高き姿に描いており、他の朝鮮人留学生の自画像とは別種の趣があり、それは書簡の趣に通じるものである。

次に、この書簡には大事な新情報が含まれている。それは高伯爵邸に寄留していると記されていることだ。高義東の父は高永喆。高家は訳官の名門。両班と常民の中間に位置する「中人」で、政府の御用を務める特権階級だった。永喆を含む兄弟四人が皆訳官（中国語、日本語）だったが、永喆は清国天津で英語も習得し、一八八三年七月、高宗の親書を携えて渡米した「遣美朝鮮報聘使」に随員として参加。帰国後は統領衙門の博文局の主事として朝鮮最初の新聞『漢城旬報』の編集に従事。官位は低いままで終わったが、その兄は一九一〇年の韓国併合に積極的に協力して日本政府から子爵の位と恩賜公債十

挿図2 東京美術学校西洋画科卒業記念写真

（前列右より）野田半三、古郡（大橋）貞一、守田千鶴、山田誠一郎、及川康雄
（中列右より）長原孝太郎、岡田三郎助、黒田清輝、和田英作、藤島武二、中村勝治郎
（後列右より）小松喜代子、鍋井克之、松美長四郎、東義東、潘寿恒、金子保、松見吉彦、大久保作次郎、中村弥藤治、宮武辰夫

万ウォンを贈与された高永喜（韓国では「丁未七賊」「庚戌国賊」の一人とされている）である。永喜は大臣職や駐日特命全権公使ほか要職を歴任し、日韓政府を繋ぐ重責を担っていたため、麻布島居坂の李王家別邸付近に邸宅があった。一九一六（大正五）年永喜の死去後は長男の高義敬が継ぎ、李世子附李王職事務官長として大きな功績があったため、二〇年に伯爵に昇格された。三十四年死去。したがって、高義東書簡の「高伯爵」とは高義敬

であり、高義東の従兄にあたる。住所は『代表的人物及事業』（一九一三年、時事通信社）に「東京都麻布区六本木一」とあり、高義東書簡と同じ電話番号が記されている。そちらが正式な住所標記だが「島居坂」は政府要人や財閥、李王家の邸宅が建ち並ぶ特別区域であったから、そう書けば通じたのである。高義東は美校在学中もおそらくこの高（高永喜在世中）の邸宅に寄留していたものと思われる。なお、高義敬は高義東の美校入学前後（明治四十二年）に美校に「曾欄（荒助）子爵銀像」の製作を依頼し、美校と関係を持った。銀像は翌年完成。曾欄は韓国統監伊藤博文の下で副統監を務め、次いで統監となった人。明治四十三年九月病死。

高義東は、「画筆生活五十年に―忘れえぬ三つのこと―」（『東亜日報』一九五九年一月五日）のなかで、美校留学の際に末松謙澄（一八五五―一九二〇）が特別入学の手配をしてくれたと述べている（留学手続きは宮内部次官小宮（三保松か）の世話になったともいう）。末松はケンブリッジ大学出身で源氏物語を初めて英訳した人。文学・法学博士、子爵、枢密顧問官にして伊藤博文の娘婿。日清戦争後韓国の財政整理に関与し、宮内省御用掛として韓国世子養育の任を担うなど韓国との関係も深かった。高英喜とも親しかったろうし、黒田清輝とは華族界の繋がりがあった。この人脈によって高義東は特別待遇で美校に入学したと考えられる。韓国併合は美校一年生の上であり、新たな植民地機構のもとで彼の官職自体は失われたのかもしれないが、彼は自ら語っているように、高英喜・高義敬の庇護のもとで上流階級の一員として何事もない留学生生活を送ることができたのである。

ここで留学の経緯について少し補足しておくと、高義東に関する最新の研究である洪善杓著「高義東の新美術運動と創作世界」(『美術史論壇』第三十八号、二〇一四年六月、韓国語)は「掌札院礼式官高義東 芸術研究をするために日本国東京に出張を命ず 隆熙三年二月十五日 宮内府」という辞令(高義東遺族蔵)の図版を掲げ、これにより一九〇九年二月十五日発令の事実を明らかにし、出張の動機について当時掌札院で新しい西洋画法受容の必要が生じて、絵の素養があり新画に興味を持っていた高義東が推薦されたのであろうという推論を提示している。また、その日本行きについては高義東の回想記などに基づいて彼が予め京城長薫学校で日本語と算術を学び、一九〇八年三月に同校を卒業したこと、および、右辞令を受けて来日したものの、初めは修業条件を満たしておらず、西洋画の基礎知識がないという理由で美校入学を拒否され、「文部省から「美校にか？」送られた紹介状によって仮入学し、一か月間長原孝太郎教授(助教授)から個人指導を受け、四月十一日に西洋画科選科に入学したとしている。

宮内府の発令や日本の文部省、黒田清輝への働きかけなどは、既述の末松謙澄のバックアップによるとしても、西洋画についてまったくの初心者である高義東を直ぐに美校に入学させるわけにはいかない。そこで黒田は基礎実技担当の長原にデッサンの指導をさせたのだろう。それは妥当の措置だったと思われる。しかし、「一か月」は受験勉強期間として余りにも短かすぎる上、撰科生入学は九月と定まっていたから、「四月十一日」入学ではありえない。高義東の記憶に誤りがあるのではないだろ

うか。「仮入学」というのも当時の予備科(三か月間)の仮入学制度を指すのではなく、黒田の配慮で非公式に美校に通学させ、デッサンを習わせたという意味だろう。高義東の境遇や入学の際の右のような黒田の配慮について知れば、彼が卒業して帰郷する際、わざわざ黒田の鎌倉別邸「奏笙軒」を訪問した理由が分かる。つまり、『黒田清輝日記』第四卷(一九六八年、中央公論美術出版)に、大正四年四月三日、「学校卒業生朝鮮人高義東(義)帰国ノ暇乞トシテ来訪 午食ノ卓ヲ共ニシ三時過迄語ル」と記されているように、美校で開かれたであろう送別会の後で、さらに黒田を鎌倉まで訪ねているのだが、そのような留学生は、黒田の日記の記述を見る限りではほかにない。しかも長時間語り合っているのである。黒田と高義東の関係は単に洋画の師と弟子というだけのものではなかったのである。

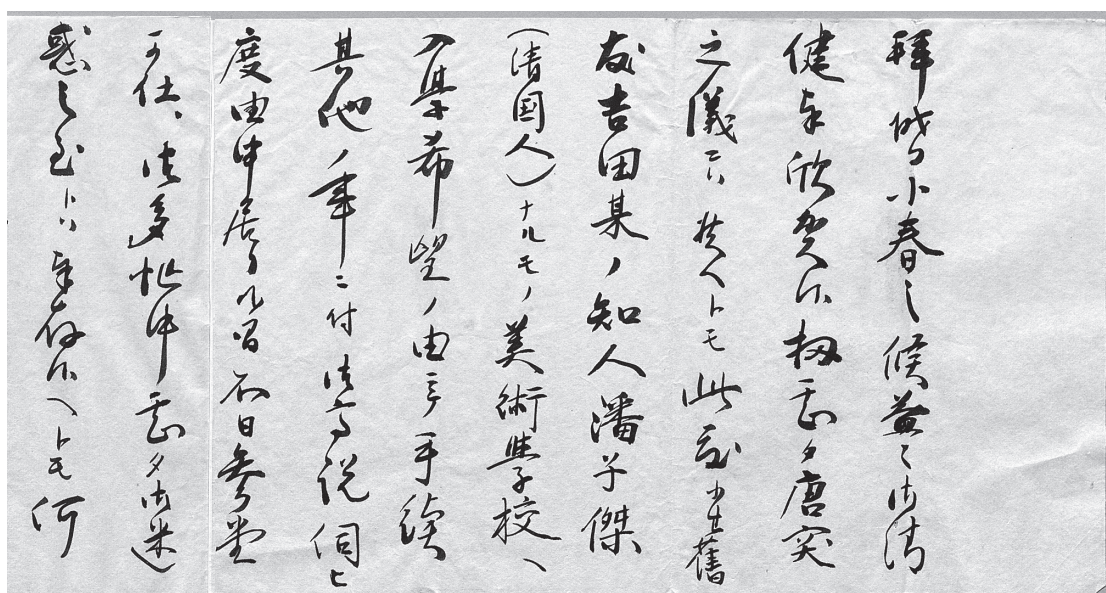
それにしても、書簡の文面にあるように卒業後八年間も無音だった高義東が東京に来て黒田に面会を懇望したのは何故か。卒業・帰郷した高義東はソウルの中央高等普通学校その他の美術教師となり朝鮮美術界の振興に務め、帰郷三年後の一九一八年には李完用の支援により朝鮮最初の美術団体である書画協会を発足させて総務に就任した。同協会は書画の大御所たちと青年画家たちを糾合して組織されたもので、当時日朝画壇から最も将来を嘱望されていた金観鎬、および金瓚永ら美校卒業生、李漢福、李済昶ら同在校生、女子美術学校卒業の羅蕙錫らも参加し、一九二一年以降毎年展覧会を開いて新気運の到来を世に告げた。また、高義東は一九年にはソウルに居た日本人画家たちと共に高麗画会を開設し、東・西洋

画の振興に着手した。一九二一年には朝鮮総督府主催の第一回朝鮮美術展覧会が開催され、高義東も出品した。開催に先立って主催者側は第一部(東洋画・四君子)の審査員に川合玉堂、第二部(西洋画・彫刻)の審査員に黒田清輝を派遣することを美校校長・帝国美術院幹事正木直彦に要請。一旦は川合・黒田の派遣に決定したが、黒田に支障が生じて代わりに岡田三郎助が派遣された。高義東の書簡はこの展覧会が閉会して二か月近くたって出されたもので、何か大事な用事でもあるかの様子である。それを知る手掛かりは皆無だが、黒田が大正十一年八月二十日の日記(前出)に「午前……高義東氏」と記しているところを見ると、ともかく対面は叶ったようだ。

なお、日本人は高義東の「義」をよく「義」と書き誤った。美校の記録文書などもそうだが、大正十五年三月に朝鮮美術会(会長久松廣治)が刊行した『鶏林精華』第一号の賛助会員名簿などにも「高義東 京城苑洞一六」と記されている。「義」は「義」と「兮」の合字で、朝鮮人がよく名に用いた字だが、日本人にはあまり馴染みがない。高義東書簡の封筒裏の署名が「高義東」と記されているところを見ると、本人も違いに拘らなかつたようだ。

明治四十二年十一月十八日 封書

(縦一七・三cm、横五九cm)



拜啓 小春之候 益々御清

健奉欣賀候 扱甚々唐突

之儀ニハ候ヘトモ 此度小生旧

友吉田某ノ知人潘子傑

(清国人)ナルモノ美術学校へ

入学希望ノ由ニテ 手続

其他ノ事ニ付御高説伺ヒ

度由申居候間 不日参堂

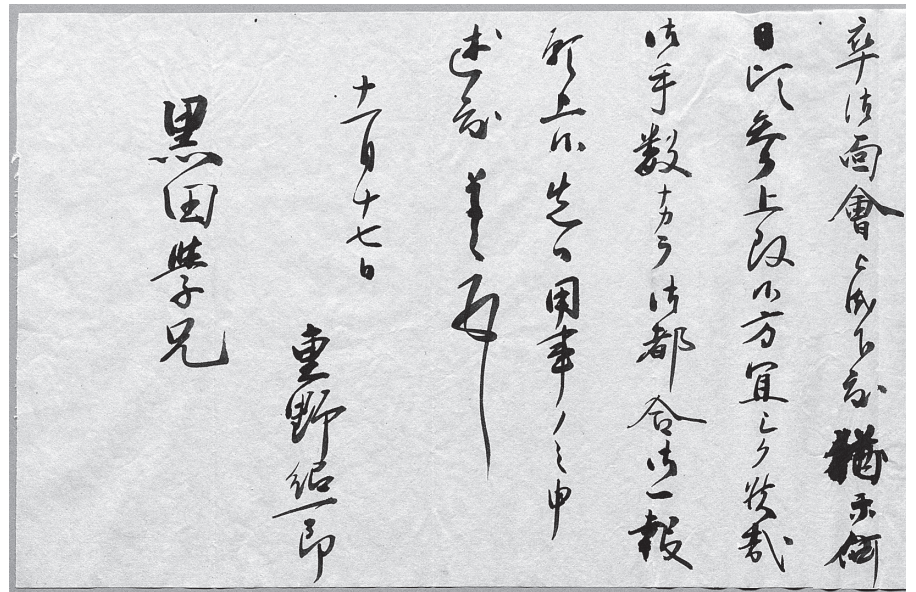
可仕、御多忙中甚々御迷

惑之至トハ奉存候ヘトモ 何

7. (留學生関連資料) 重野紹一郎書簡
解題

美校入学志望の清国人潘子傑の紹介状である。潘子傑という名は美校留學生のなかにはない。しかし、潘寿恒という人がいる。一八八五年安徽省桐城県に生まれ、天津の日ノ出学館を卒業して明治四十一年四月十七日來日、同四十三年九月二十六日に美校西洋画科撰科に官費留学し、大正四年三月に卒業した。卒業制作自画像が東京芸術大学美術館に収蔵されており、西洋画科一同の卒業記念写真には高義東と並んで写っている。帰国後、農商部権度製造所に勤務したこと以外、足跡は未詳である。『東京美術学校一覽』に大正四、五年の住所が北京子傑寓東城下面胡同とあり、大正十三、十四年の住所が北京子傑寓鬼城面胡同とある。潘寿恒は住所の「子傑」を画号にしていたのかも知れない。

紹介状を書いた重野紹一郎(一八六七?)は鹿児島出身。東京外国語学校教授。父は薩摩藩の史学者で帝国大学教授・貴族院議員となつた重野安繹(一八二七-一九一〇)。黒田清輝は薩摩の郷党として重野父子と交流があつた。



卒御面会被成下度 猶未何

日頃参上致候方宜シク候哉

御手数ナカラ御都合御一報

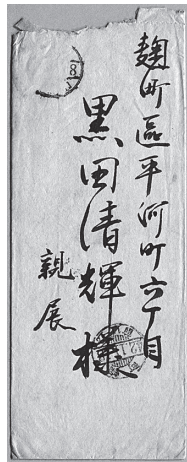
願上候 先ハ用事ノミ申

述度 草々頓首

十一月十七日

重野紹一郎

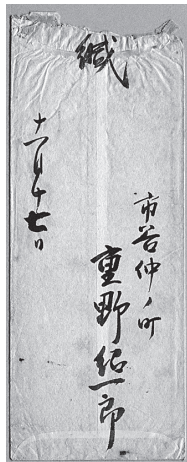
黒田学兄



麹町区平河町六丁目

黒田清輝様

親展



市谷仲ノ町

十一月十七日

(付記)

今回紹介した書簡は、東京文化財研究所田中淳、田中潤両氏の御教示によつて存在を知った。黄輔周書簡の翻刻と和訳については松村茂樹氏に、高義東書簡解説の参考にした韓国語文献の蒐集と和訳については田代裕一郎氏にご助力いただいた。

(よしだちづこ・東京藝術大学非常勤講師)